

# 指導者の指導方針が構成員の集団凝集性に与える影響

The effect of leader's principle of guidance on cohesiveness in sport groups.

村 瀬 浩 二

Koji MURASE

(和歌山大学教育学部)

安 部 久 貴

Hisataka AMBE

(東京工科大学講師)

2013年10月3日受理

## Abstract

The purpose of this study was to clarify effects of coaches' coaching style on team cohesiveness in sports groups. Twenty seven coaches who instruct female elementary schools' volley ball team and 238 their players participated in the study. The coaches asked to complete a questionnaire in coaching styles. The players also required to answer a questionnaire in group cohesiveness. ANOVA was utilized in order to clear relationships between the coaching style and the players' perception of group cohesion. As a result of the research, it was revealed that four factors of coaching style (observation, self-development, tactics, and motivation) influence on the player's team cohesiveness. Especially, the managers' coaching style laying emphasis on observation, self-development and motivation of their players enhanced the players' perception of "Closeness" and "Team work" for their team. In addition, all factors of cohesiveness were influenced by coaching style focused on tactics, therefore it is suggested that improvement of team performance through effective tactics seems impact on young volley ball player's perception of team cohesion.

**Key words** : elementary student, volley ball, interpersonal attractive force, task-oriented, team manager

## I 緒言

スポーツ集団において、凝集性の高さはその集団の様々なパフォーマンスに影響を及ぼす。この集団凝集性はパフォーマンスを高め、その達成感・満足感によって凝集性が高まるという循環モデルが提示されている(Martens & Peterson, 1971)。しかし阿江(1987)はモデルの実証研究においてこのモデルと一致した結果が得られなかったことから、スポーツチームの集団凝集性は少なくとも「対人魅力凝集」と「所属・課題凝集」の2側面から成立するとしている。これに関連して阿江(1986)はこの集団凝集性に関する多次元の尺度を開発している。また、特にボールゲームにおいてはこの集団凝集性の高さが競技成績にも影響することを報告している(阿江, 1987)。

この対人魅力凝集性と所属・課題凝集性については競技レベル、競技志向による差異が報告されている。阿江(1985)は学生や社会人の女子バレーボールチームを対象に集団凝集性を調査し、レクリエーション志向のチームでは対人魅力凝集性が高く、競技志向のチームでは所属・課題凝集性が高いと述べている。さらに所属・課題凝集についてはその後の競技成績と有意に

関係するとも述べている。大学女子ハンドボールチームを対象とした研究においても上位チームでは所属・課題凝集性が高く、下位チームでは対人魅力凝集性が高いことが報告されている(檜塚ほか, 2008)。これらのことから競技志向のスポーツチームでは課題凝集性がその後のパフォーマンスに様々なメリットを与える と推察できる。

ではこの集団凝集性を高める介入方法は有るのだろうか。Senecal et al. (2008)はチームでの目標設定により集団凝集性が向上したことを報告している。このなかでは統制群と比較して、目標設定により対人魅力凝集性、所属・課題凝集性ともに効果が認められたことが報告されている。またStevens & Bloom(2003)は役割行動やコミュニケーション、目標設定などによるチームビルディングがSenecal et al. と同様の効果があったことを報告している。これらの研究では目標設定や役割行動など主に集団内での課題関与の強化を目的とした介入により、所属・課題凝集性に直接働きかけているが、結果的には対人魅力凝集性にも好影響を与えていると推察できる。このことについて内田ほか(2011)はスポーツチームのパフォーマンスが集団効力

感を高め、所属・課題凝集性を向上させる、またはパフォーマンスが所属・課題凝集性を高め集団効力感を向上させるモデルを提示している。つまり、課題・所属凝集はパフォーマンスが起因となり変化するモデルである。このほかにもパフォーマンスを予測する要素として集団凝集性を挙げる報告(河津ほか, 2009)もなされており、パフォーマンスと集団凝集性は正の関連性を有している(内田ほか, 2011)といえよう。

また一方でスポーツ集団の直接的課題(勝利、技能向上)ではなく、別の課題にチームとして挑むことで凝集性を高めようとする試みも報告されている。例えば横山ほか(2012)は女子バレーボールチームにASE(Action Socialization Experience)の課題を実施し、その前後でSPTT(Sport Psychological Test for Teams)による測定を行ったところ所属・課題凝集性にあたるチーム有能感、対人魅力凝集性にあたるメンバー関係因子の得点が有意に向上したことを報告している。また、村瀬(2012)は女子サッカーチームを対象にOBS(Out Bound School)をにおいて野外活動プログラムを実践し集団での課題解決を実施した。その結果、チーム内の相互理解度が有意に向上した事を報告している。これらの報告はパフォーマンスが起因ではなく課題解決の過程においてチーム内の凝集性、特に対人魅力凝集性が高まることを示している。

これらの研究のうち前者のチームパフォーマンスに直結するチームビルディングではパフォーマンスの向上を通して所属・課題凝集性が向上することが示唆され、後者では課題解決を通して主に対人魅力凝集性を高めることが示唆されていた。しかしこれらの報告ではプログラム化したチームビルディングをチーム外の第3者が主導して実践したもので有り、スポーツチームの通常の指導の中で行われていることではない。つまり、指導者の指導方針と凝集性の関連を明らかにした研究は見当たらない。またここまで挙げた研究は社会人や大学生が対象で有り、所属・課題凝集性と対人魅力凝集性が分化していた。しかし小学生の段階では所属・課題凝集性とがまだ未分化で、スポーツ場面以外での人間関係がスポーツ場面でのチームワーク、さらに競技能力の高さに直結することも予想できる。特に本研究で対象とするバレーボールでは集団凝集性を高めることが競技力の向上に直結する。

そこで本研究ではスポーツ少年団女子バレーボールチームにおける指導者の指導方針が選手達の凝集性に与える影響を明らかにすることを目的とする。

## Ⅱ 方法

### 1. 対象

関西地方の少年団女子バレーボールチーム27チームに所属する指導者、選手に調査を依頼し、指導者56名(男性41名:平均年齢48.8歳、女性15名:平均年齢43.5

歳、うち監督25名)、選手238名(小学校3年生:49名、4年生:62名、5年生:62名、6年生:65名)から回答を得た。

## 2. 調査内容

### 調査内容:質問紙調査

#### (1)指導者用

- ・属性項目(性別、年齢、役割、指導年数)
- ・指導方針を明らかにするためにスポーツチームマネジメント自己評価尺度(7因子、27項目、7件法;長澤・間野, 2012)を用いた。この指導者のチームマネジメント自己評価尺度の7因子は以下の通りである。  
①観察 ②モラル ③コミュニケーション ④啓発  
⑤戦略 ⑥動機づけ ⑦基本練習  
これらの因子に関する指導者の自己評価を指導方針とした。

#### (2)選手用

- ・属性項目(学年、競技年数)
- ・集団凝集性測定尺度(5因子、22項目、4件法;阿江, 1986)  
集団凝集性測定尺度5因子は以下の通りである。  
①親密さ ②チームワーク ③魅力 ④貢献の認知  
⑤コーチング評価  
本研究ではこの5因子について、「親密さ」を対人魅力凝集性、その他4因子を所属・課題凝集性として取り扱う。

## 3. 分析方法

指導者の指導方針については長澤・間野(2012)が報告した7因子の因子構造を採用し、因子関連項目の点数の平均を因子得点とした。この因子得点について、平均と標準偏差から7因子それぞれについて高群、中群、低群に分類した。

なお、指導者の指導方針因子得点の分類については平均 $\pm 0.5SD$ を基準に3群に分類した。各因子の平均ならびに標準偏差を以下に示す。

「観察」 $m=5.59$ 、 $SD=1.09$

「モラル」 $m=6.13$ 、 $SD=0.67$

「コミュニケーション」 $m=5.73$ 、 $SD=0.68$

「啓発」 $m=5.33$ 、 $SD=1.42$

「戦略」 $m=5.19$ 、 $SD=1.22$

「動機づけ」 $m=5.66$ 、 $SD=0.87$

「基本練習」 $m=5.53$ 、 $SD=1.03$

またチームの指導方針は監督が決定すると考えられることから、この3群に分類した中から監督だけを抜粋した。その結果、「観察」は高群9名、中群13名、低群3名、「モラル」は高群11名、中群9名、低群5名、「コミュニケーション」は高群11名、中群8名、低群6名、「啓発」は高群8名、中群12名、低群5名、「戦略」は高群9名、中群11名、低群5名、「動機づけ」は

高群11名、中群12名、低群2名、「基本練習」は高群5名、中群17名、低群3名となった。この各因子に関する監督の分類(高・中・低群)を基準変数とし、その監督のチームに所属する選手の集団凝集性に関する因子得点を目標変数として一元配置分散分析を実施した。 $p<0.05$ で有意とし、有意差が認められた場合にはTukey法による多重比較を実施した。

### Ⅲ 結果および考察

#### (1) 監督の指導方針「観察」選手の凝集性の関連

監督のチーム指導方針「観察」を分類したものを基準変数、集団凝集性5因子を目標変数として1元配置分散分析を実施した。その結果、「親密さ」( $p<0.001$ )とチームワーク( $p<0.01$ )で有意差が認められた。有意差が認められたことからTukey法による多重比較を実施したところ「親密さ」では「観察」高群( $m=3.81$ ,  $SD=0.29$ )と中群( $m=3.61$ ,  $SD=0.39$ )の間に0.1%水準で、「観察」高群と低群( $m=3.58$ ,  $SD=0.48$ )の間に5%水準で有意差が認められた。「チームワーク」では「観察」高群( $m=3.81$ ,  $SD=0.29$ )と低群( $m=3.81$ ,  $SD=0.29$ )の間に1%水準で有意差が認められた(図1参照)。

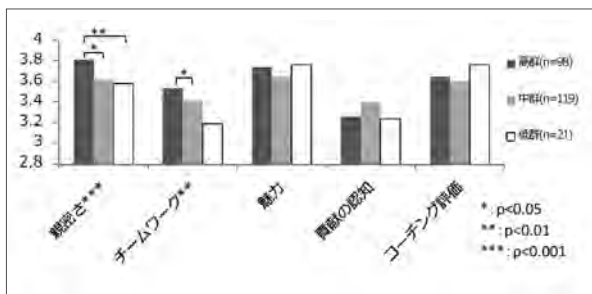


図1 監督の「観察」による選手の集団凝集性の比較

このことは指導者が選手の観察を重視しているか否かが選手達の親密さやチームワークに影響を与えると解釈できる。つまり、監督が選手を観察しているチームでは対人魅力と所属・課題凝集性の一部を向上させることに繋がると解釈できる。観察を重視することは選手への指導方法、選手の評価を各個人に合わせたきめ細かい指導へと発展させる基本的な要素となる。このような個別の指導と評価が各個人のパフォーマンス、チームパフォーマンスを向上させ、凝集性を高めると解釈できる。これは内田ほか(2011)が示したモデルに合致するが、本研究の結果では対人魅力も向上していることから、小学生段階ではパフォーマンスが対人魅力、所属・課題凝集性の両方に影響を与えたと推察できる。

#### (2) 監督の指導方針「コミュニケーション」と選手の凝集性の関連

監督の指導方針「コミュニケーション」を基準とし、凝集性5因子を目標変数とした分散分析を実施したところ「チームワーク」( $p<0.01$ )に有意差が認められた。Tukey法による多重比較を実施したところ「コミュニケーション」高群( $m=3.54$ ,  $SD=0.41$ )と中群( $m=3.33$ ,  $SD=0.54$ )の間に1%水準で有意差が認められた(図2参照)。

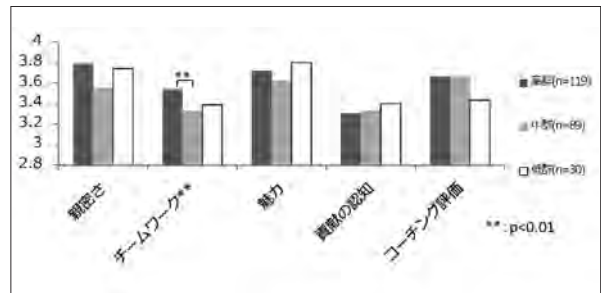


図2 監督の「コミュニケーション」による選手の集団凝集性の比較

この結果ではコミュニケーション高・中・低群の中でも中群が最もチームワークが低く、高群と低群の間については有意差は認められなかった。この結果は顕著な結果ではないが、指導者がコミュニケーションに配慮することによって所属・課題凝集性の中でもチームワークだけを高める効果があると解釈できる。また一方では指導者のコミュニケーションへの配慮は対人魅力凝集性やチームへの魅力、コーチングの評価にはつながらないことも重視すべきである。競技場面では選手との接し方などは、集団凝集性にあまり影響を与えないとも解釈できよう。体育授業場面では子どもとの接し方は重要な要素となるが、選手の勝利志向が明確である競技場面では、その影響は小さくなると推察できる。

#### (3) 監督の指導方針「啓発」と選手の凝集性の関連

監督の指導方針「啓発」を基準とし、凝集性5因子を目標変数とした分散分析を実施したところ「親密さ」( $p<0.01$ )と「チームワーク」( $p<0.01$ )、「コーチング評価」( $p<0.05$ )に有意差が認められた。Tukey法による多重比較を実施したところ、「親密さ」では「啓発」高群( $m=3.78$ ,  $SD=0.31$ )と低群( $m=3.55$ ,  $SD=0.48$ )の間に1%水準で有意差が認められた。「チームワーク」では「啓発」高群( $m=3.52$ ,  $SD=0.41$ )と低群( $m=3.23$ ,  $SD=0.56$ )の間に1%水準で、中群( $m=3.46$ ,  $SD=0.44$ )と低群の間に5%水準で有意差が認められた。「コーチング評価」では多重比較の結果有意差は認められなかった(図3参照)。

この結果は指導者が啓発を重視すること、換言すれ



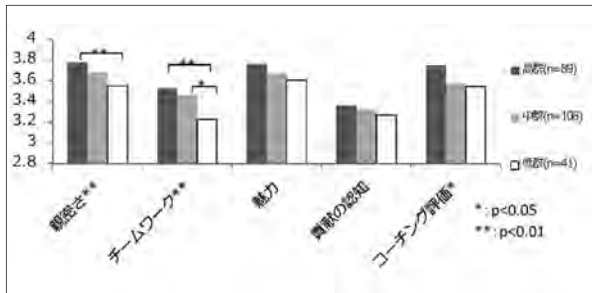


図3 監督の「啓発」による選手の集団凝集性の比較

は選手に自律的な行動を求めるチームほど、チームワークや親密さが高まり、コーチへの信頼も高くなると解釈できるであろう。魅力や貢献の認知についても有意差は認められないものの高群>中群>低群の順に並んでおり、自律的な行動を求める指導方針は対人魅力凝集性と所属・課題凝集性ともに高める効果があると解釈できる。このような指導方針では選手達は仲間同士で考え、共同的な気づきを深めていく中で親密さやチームワークを高めていくと想像できる。またそのような自律的な行動を促し、その結果パフォーマンスを向上させることでコーチング評価を高めるとも考えられる。

#### (4) 監督の指導方針「戦略」と選手の凝集性の関連

監督の指導方針「戦略」を基準とし、選手の集団凝集性5因子について比較したところ、全ての因子について有意差が認められた(「チームワーク」、「魅力」 $p<0.01$ 、その他3因子は $p<0.001$ )。多重比較の結果、「親密さ」については高群( $m=3.74$ ,  $SD=0.38$ )と低群( $m=3.42$ ,  $SD=0.40$ )の間に0.1%水準で、中群( $m=3.76$ ,  $SD=0.29$ )と低群の間に0.1%水準で有意差が認められた。「チームワーク」については高群( $m=3.49$ ,  $SD=0.48$ )と低群( $m=3.19$ ,  $SD=0.51$ )の間に1%水準で、中群( $m=3.49$ ,  $SD=0.43$ )と低群の間に1%水準で有意差が認められた。「魅力」については高群( $m=3.74$ ,  $SD=0.47$ )と低群( $m=3.48$ ,  $SD=0.51$ )の間に5%水準で、中群( $m=3.72$ ,  $SD=0.41$ )と低群の間に5%水準で有意差が認められた。「貢献の認知」については高群( $m=3.39$ ,  $SD=0.68$ )と低群( $m=2.94$ ,  $SD=0.63$ )の間に1%水準で、中群( $m=3.43$ ,  $SD=0.61$ )と低群の間に0.1%水準で有意差が認められた。「コーチング評価」については高群( $m=3.75$ ,  $SD=0.38$ )と低群( $m=3.37$ ,  $SD=0.83$ )の間に0.1%水準で有意差が認められた(図4参照)。

これらの結果では総じて、高群と低群、中群と低群の間に有意な差が認められたことから戦略的な指導がなされていないチームでは集団凝集性が低い結果となった。これは他の指導方針と比較しても最も強い影響力があり、今回対象とした少年女子バレーボールチームにおいても戦略的指導の重要性が明らかとなった。

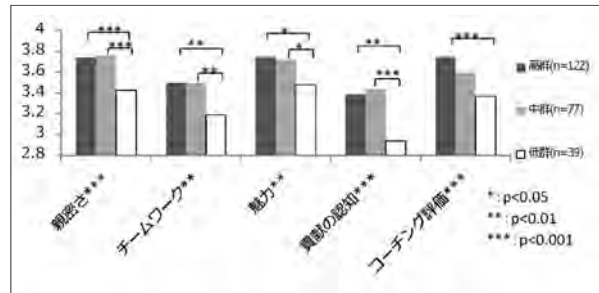


図4 監督の「戦略」による選手の集団凝集性の比較

本研究における対象チームは任意で子ども達が集まっているチームであり、ある程度勝利志向を持って集まっている。このようなチームでは勝利への方法論を授けること、パフォーマンスを高めることが集団凝集性を高めることに直結すると解釈できる。これは内田ほか(2011)が示したとおりパフォーマンスの向上が所属・課題凝集性を高め、さらに対人魅力凝集性も高めていることが推定できよう。勝利志向の集団において、勝利に直結する方法を指導し、その方法によってパフォーマンスを高めることができればスポーツ集団としての集団効力感を高め、子ども達の間には所謂「我々」意識が生まれ、所属・課題凝集性が高まると推察できる。さらにその結果として「親密さ」に代表される対人魅力凝集性も高まると解釈できる。

#### (5) 監督の指導方針「動機づけ」と選手の凝集性の関連

監督の指導方針「動機づけ」を基準とし、凝集性5因子を比較したところ「親密さ」( $p<0.001$ )と「チームワーク」( $p<0.001$ )、「コーチング評価」( $p<0.01$ )に有意差が認められた。多重比較を実施したところ、「親密さ」では「動機づけ」高群( $m=3.80$ ,  $SD=0.29$ )と中群( $m=3.63$ ,  $SD=0.40$ )の間に1%水準で有意差が認められ、高群と低群( $m=3.51$ ,  $SD=0.44$ )の間に1%水準で有意差が認められた。「チームワーク」では「動機づけ」高群( $m=3.60$ ,  $SD=0.32$ )と中群( $m=3.38$ ,  $SD=0.55$ )の間に1%水準で、高群と低群( $m=3.13$ ,  $SD=0.54$ )の間に0.1%水準で有意差が認められた。「コーチング評価」では「動機づけ」高群( $m=3.77$ ,  $SD=0.34$ )と中群( $m=3.56$ ,  $SD=0.67$ )の間に5%水準で、高群と低群( $m=3.41$ ,  $SD=0.57$ )の間に1%水準で有意差が認められた(図5参照)。

この結果は指導者が選手の動機づけを高める指導方針のチームは、チームワークや親密さが高まり、コーチへの信頼も高くなると解釈できるであろう。魅力についても有意差は認められないものの同様の傾向が認められることから、目標設定等の動機づけを高めようとする指導は対人魅力凝集性と所属・課題凝集性ともに高める効果があると解釈できる。この傾向は啓発と同様の傾向が認められることから、目標設定など動機づけを重視した指導方針により、自律的な行動を促し

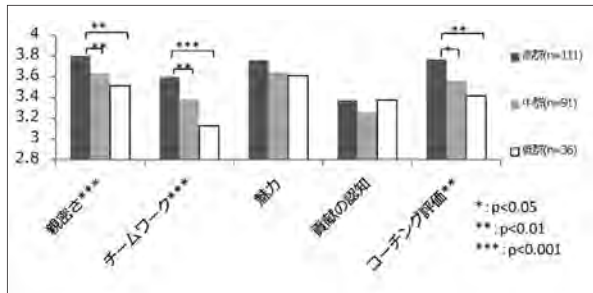


図5 監督の「動機づけ」による選手の集団凝集性の比較

仲間同士で協力し、共同的な気づきを深めると想像できる。またそのような自律的な行動によりパフォーマンスが向上することでコーチング評価を高めるとも考えられる。

#### IV 総合考察

選手の集団凝集性5因子(親密さ、チームワーク、魅力、貢献の認知、コーチング評価)に影響を与える監督の指導方針として、「観察」、「啓発」、「戦略」、「動機づけ」といった要素の重要性が示唆された。なかでも「動機づけ」、「啓発」は選手の親密さおよびチームワークについて有意差が認められ、その他3因子についてもほぼ類似した影響を示していた。この2つの指導方針は選手を内発的に動かそうとする指導方法であり、選手を内発的に動機づけ自発的に動くことを勧める指導方針である。このような指導の下、選手達は仲間同士で協力し合う中で自他への気づきを深め、親密さを深めていくことになるであろう。この段階で本研究の対象である小学生では対人魅力である親密さだけでなく、所属課題凝集性の一部であるチームワークも同時に向上すると推察できる。

また監督の指導方針「戦略」については、試合での勝敗に直結する戦略的な指導が全くなされていない場合、凝集性、指導者への評価ともに低下することが確認できた。このことは競技スポーツチームに所属している以上、勝敗にこだわるのが当然であり、戦略指導によって得たパフォーマンスの向上自体がチームの凝集性と指導者への評価を高めると解釈できよう。この影響力は啓発、動機づけ、観察よりも強く、集団凝集性のより多くの因子に影響することから、スポーツ集団における戦略的指導、パフォーマンス向上の重要性が確認できよう。

「観察」については選手の親密さとチームワークを向上させていたが、選手の能力を的確に見極めることがパフォーマンスの向上に直結することや、啓発、動機づけの指導方針をより効果的に選手に伝える効果を持つと推察できることから、直接的な影響はパフォーマンスの向上だけに限定できる。これらのことから図6の関係が成り立つであろう。この図は指導者の指導方針のうち、戦略と観察はパフォーマンスの向上を介

して集団凝集性を高め、啓発と動機づけは凝集性とパフォーマンスを同時に向上させる効果があることを示している。また、その中でも戦略的指導が選手のパフォーマンス向上を介して集団凝集性に強い影響があることも示唆する。

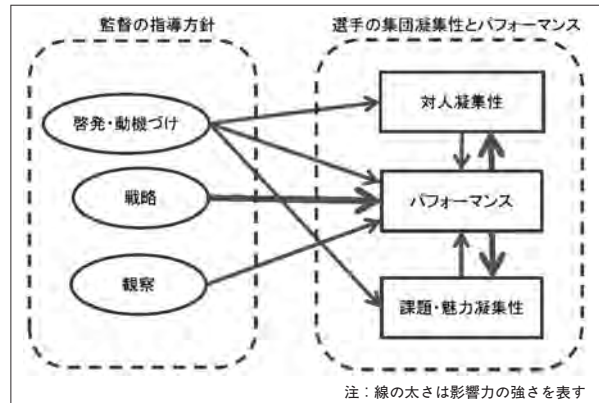


図6 監督の指導方針と選手の集団凝集性の関係

最後に監督の指導方針の中では、モラル、基本練習の2因子が選手の凝集性への影響を確認できなかった。礼儀を重視することや基本的な練習の充実を図ることは凝集性には直結しないことが確認できた。

#### V 文献

- 阿江美恵子(1985) 集団凝集性と集団志向の関係、および集団凝集性の試合成績への効果、*体育学研究*, 29(4), 315-323
- 阿江美恵子(1986) 集団凝集性尺度の再検討、*スポーツ心理学研究*, 13(1), 116-118.
- 阿江美恵子(1987) スポーツ集団の凝集性に関する文献的研究、*体育学研究*, 32(2), 117-125.
- 檜塚正一, 五藤佳奈, 伊達萬里子, 田嶋恭江(2008) 集団凝集性と心理的競技能力の関連性について：大学女子ハンドボール選手の場合、*武庫川女子大学紀要・人文・社会科学編*, 56, 77-85.
- 河津慶太, 杉山佳生, 永尾雄一, 王雪蓮, 熊崎絵理(2009) スポーツチームにおけるチームパフォーマンス予測モデルの構築、*健康科学*, 31, 61-68.
- Martens, R. & Peterson, J. A. (1971) Group cohesiveness as a determinant of success and member satisfaction in team performance. *International Review for the Sociology of Sport*, 6, 49-61.
- 村瀬浩二(2012) 野外活動プログラムを用いたチームビルディングの効果—女子サッカーチームを対象に—, *日本スポーツ心理学会第39回大会抄録集*
- 長澤淑恵, 間野義之(2011) スポーツ指導者のコンピテンシーに関する研究, *早稲田大学大学院スポーツ科学研究科修士論文*
- Senécal, J., Loughhead, T. M. & Bloom, G. A. (2008) A season-long team-building intervention: Examining the effect of team goal setting on cohesion. *Journal of Sport & Exercise Psychology*, 30(2), 186-199.
- Stevens, D. E. & Bloom, G. A. (2003) The effect of team building on cohesion. *Avante*, 9(1), 43-54.
- 内田遼介, 土屋裕睦, 菅生貴之(2011) スポーツ集団を対象とし

た集合的効力感研究の現状と今後の展望：パフォーマンスとの関連性ならびに分析方法に着目して．体育学研究，56(2)，491-506．

横山誠，村瀬浩二，相奈良律，森本崇資(2012) 本学女子バレーボ

ールのチームビルディングの成果：チームビルディングを活用したチームマネジメントの可能性．国際研究論叢：大阪国際大学紀要，25(3)，209-216．